

食品安全委員会委員と消費者団体との情報交換会（第9回）

1. 日時 : 平成27年7月10日（金） 10:00～12:00

2. 場所 : 食品安全委員会 委員長室

3. 出席者 : (敬称略)

(消費者団体)

犬伏由利子（消費科学センター 理事）、河野康子（全国消費者団体連絡会 事務局長）、笹川博子（日本生活協同組合連合会 組織推進本部長）、夏目智子（全国地域婦人団体連絡協議会 事務局長）、山根香織（主婦連合会 参与）

(食品安全委員会委員)

佐藤委員長、山添委員、熊谷委員、吉田委員、堀口委員、村田委員

(食品安全委員会事務局)

姫田事務局長、東條事務局次長、山本総務課長、関野評価第一課長、鋤柄評価第二課長、植木情報・勧告広報課長、木下リスクコミュニケーション官 他

4. 議事

(1) 食品安全委員会の活動状況

(2) 話題提供 「酒と健康」

食品安全委員会 佐藤 洋 委員長

(3) 質疑応答、意見交換会

5. 配布資料一覧

資料1-1 食品健康影響評価の審議状況

資料1-2 主な食品健康影響評価について

資料2 食品に係るリスク認識アンケート調査結果について

資料3 食品の安全に関するリスクコミュニケーションのあり方について

資料4 酒と健康

6. 議事内容

【資料4】

(1) 意見交換での当方からの主な説明

- ・ 薬とアルコールは、摂取量が大きく違う。薬は、摂取量がアルコールと比較して1/1000程と少ない上に服用期間も決められている。物性面からは、体に与える影響は少なく、処方された期間に決められた量を飲むことが大切。一方、アルコールは摂取量が多いので、休肝日を設けることが推奨されている。
- ・ 授乳中に飲酒した場合、アルコールは母乳におそらく影響を与える。乳児への影響を避けるため、出産後から3～6か月はアルコールを飲酒しないことを薦める。
- ・ 妊娠中の飲酒は、胎盤形成（妊娠4か月頃完成）後に注意が必要。不妊治療中の飲酒については主治医と相談していただきたい。
- ・ アルコール濃度の違いでリスクは異なり、一般的に、アルコール濃度が高い方がハイリスクである。口や食道などの粘膜への影響も考えると、アルコール度数が40%以上はリス

クが高いと考えられる。また、アルコールの吸収速度は血中のアルコール濃度に影響する。すきっ腹で一気に飲むのは良くない。

- ・ アルコールの吸収には個人差がある。アルコールは腸で吸収されるが、胃から吸収する人もおり、「弱い」と言われ顔が赤くなる。また、吸収には、精神的な影響もある。
- ・ ノンアルコールでもアルコールを飲んだ気になるが、恐らく、プラセボ効果*があると思われる。また気分だけでなく、顔が赤くなったりしたのは、アセトアルデヒド以外のアルデヒドも血管拡張作用があるので、その影響も考えられる。

* プラセボ効果：例えば、頭痛に対する効果のない砂糖を薬と偽って服用してもらった場合、頭痛が治るといった効果。

(2) 意見交換での参加者からの主なご意見

- ・ 現在の表示制度では、アルコールが1%未満であれば、ノンアルコールと言えるため、大丈夫だと思って車の運転をする方がいるが危険だと思う。また、地方では車は必須であり、ノンアルコール飲料を飲んで運転をする確率が上がる。さらに、ノンアルコールの機能性表示食品や特定保健用食品も出てきているので、プラスのイメージでつつい手が出てしまう。

(補足) 1%未満のものを飲んでも飲酒運転に該当する場合がありますので、現在は、「業界の自主基準で、0.00%でなければノンアルコールとは表示できない」こととされている。(ごく少量含まれている可能性はある。食安委)

【資料2】食品に係るリスク認識アンケート調査の結果

- ・ 一般消費者と専門家では、認識がかなり異なる。また、全ての物質は毒であり、量の問題であるという認識が大切であると思った。
- ・ アンケートの間に「健康への影響に気を付けなければならない項目」とあるが、主語が自分か、社会かによって、回答は異なってくる。専門家は、社会が気を付けなければいけないもの、一般消費者は、自分が気を付けなければいけないものを回答している可能性もある。また、「食生活等」と聞いているので、タバコは食生活ではないとして、順位が下がっている可能性がある。

(以上)